

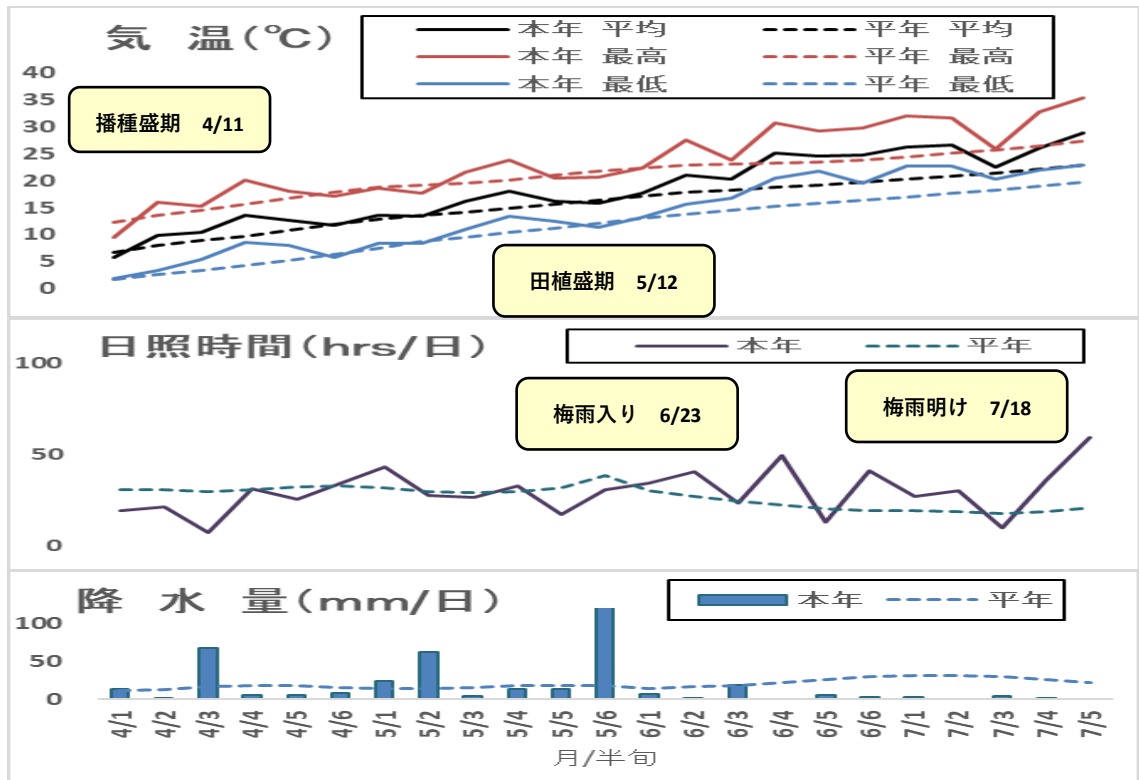
令和7年産 稲作情報 第8号

令和7年7月29日
JA全農みやぎ

～出穂期は 概ね 前年並みの見込み～

～本田や周辺で斑点米カメムシ類が多発 適期防除の徹底を～

1 令和7年の気象経過（古川アメダス）と東北地方の1か月予報



◆7月24日発表 東北地方の1か月予報(7月26日～8月25日までの天候見通し)【気象庁ホームページより】

- ・東北太平洋側では、天気は数日の周期で変わるが、平年に比べ晴れの日が多い。期間の前半は、気温がかなり高くなる見込み。
- ・向こう1か月の気温は、高い確率80%、平年並み若しくは低い確率10%。
- ・降水量は、多い若しくは平年並みの確率30%、少ない確率40%。
- ・日照時間は、多い若しくは平年並みの確率40%、少ない確率20%。

気温、降水量、日照時間の各階級の確率 (%)				
気温	東北地方	向こう1か月 07/26～08/25	10	80
		1週目 07/26～08/01	10	80
		2週目 08/02～08/08	10	80
		3～4週目 08/09～08/22	10	60
降水量	東北日本海側	向こう1か月 07/26～08/25	30	30
	東北太平洋側	向こう1か月 07/26～08/25	40	30
日照時間	東北地方	向こう1か月 07/26～08/25	20	40

■ 低い(少ない) ■ 平年並 ■ 高い(多い)

2 生育状況（令和7年度 宮城県米づくり推進本部臨時情報 第1号より一部抜粋）

（1）作況試験（古川農業試験場，7月10日現在）

- ・5月9日植えの「ひとめぼれ」の草丈は72cm程度で平年より長い。茎数は557本/m²で平年より少ない。
- ・葉数は10.9枚で平年よりやや多く，生育ステージは平年よりやや進んでいると思われる。
- ・葉色（GM値）は38.7で概ね平年並である。
- ・幼穂長は7.4mmで，平年より1日早い7月6日頃に幼穂形成期に達したとみられ，出穂期は7月30日頃と予想される。
- ・「だて正夢」及び「金のいぶき」も幼穂形成期に達している。

表1 古川農業試験場作況試験ほの生育概況

品種名	移植日	草丈 (cm)	茎数 (本/m ²)	葉数 (枚)	葉色 <GM値>	幼穂長 (mm)	幼穂 形成期
ひとめぼれ	5月9日	71.7 (112%)	557 (88%)	10.9 (0.4)	38.7 (1.2)	7.4 (5.8)	7月6日 (1日早)
	5月20日	69.3 (112%)	617 (97%)	10.5 (0.2)	39.4 (-1.0)	0.5 (0.1)	未
	5月30日	63.9 (113%)	640 (103%)	10.1 (0.5)	41.3 (-0.3)	0.2 (0.1)	未
ササニシキ	5月9日	69.5 (108%)	589 (82%)	10.8 (0.2)	34.3 (-2.7)	11.8 (9.9)	7月6日 (2日早)
つや姫	5月9日	74.0 (119%)	568 (93%)	10.9 (0.6)	39.8 (0.1)	0.3 (0.1)	未
だて正夢	5月9日	77.1 (110%)	494 (93%)	11.2 (0.6)	37.3 (-2.4)	2.7 (1.7)	7月7日 (3日早)
金のいぶき	5月9日	77.6 (117%)	543 (87%)	11.6 (0.5)	36.5 (0.7)	4.6 (3.9)	7月7日 (6日早)

注1) 各項目のかっこ内は平年差・比を表す。ただし，5月30日移植ひとめぼれは前年差・比。

2) 平年差・比は直近5か年（令和2年～6年）の平均値より算出。

（2）県全体の水稻の出穂状況（宮城県農政部みやぎ米推進課 公表，7月24日現在）

- ・7月24日現在，**水稻作付面積の4.0%の水田が出穂期を迎えている**が，県全体の出穂始期には達していない。なお，大河原地区では21.6%の水田が出穂期を迎え，7月22日に出穂始期に達している。

区 分	出穂始期 (5%)	出穂期 (50%)	穂揃期 (95%)
本 年	未	未	未
前 年	7月24日	7月29日	8月5日
平 年	7月28日	8月1日	8月9日
平年差	-	-	-

（3）【参考】出穂状況の観察調査（7月25日現在） 及び 出穂の見込み

- ・角田市 ひとめぼれ；走り穂（出穂前3日，出穂期は7月28日頃）
- ・柴田町 ひとめぼれ；走り穂（出穂前3日，出穂期は7月28日頃）
- ・亘理町 つや姫；葉耳間長－5cm（出穂期は8月6日～8日頃）
- ・大郷町 ひとめぼれ；走り穂（出穂前3日，出穂期は7月28日頃）

→**今年の「ひとめぼれ」等の中生品種の出穂期は，平年より3日程度早い**

7月29日頃と予測される。

3 今後の管理

(1) 出穂後の水管理

・今後も高温が続くと予想されていることから、出穂前から出穂後 30 日頃までは、土壌を湿った状態に保つ「飽水管理」を行う。

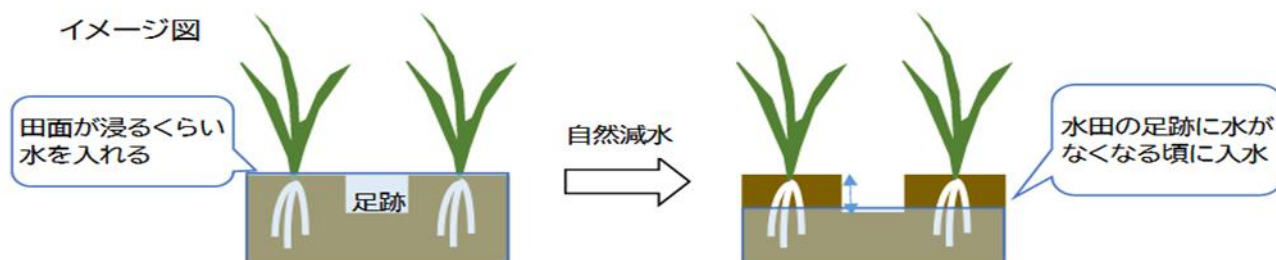
●飽水管理の方法

- ①水尻を閉め、畦畔からの漏水が無いか確認する。
- ②田面がひたひたに湿るくらいに水を入れる。
- ③水を止めたら、水尻は閉めたまま、自然減水させる。
- ④水田の足跡に水が無くなる頃（目安は3～5日おき）、次の水を入れる。

◆飽水管理のメリット

- ①限られた用水で、水管理が可能である。
 - ②地面が見える（空気が土の中に入る）ので、根の活力維持に有効である。
 - ③湛水状態（水が暖められ、夜間も温度が下がらない）と異なり、地温の上昇を抑制できる。
- 稲の温度が夜間に下がるため、光合成により作られた養分が靱に転流しやすくなる。
- 「白未熟粒」や「胴割粒」の発生を抑制できる。

イメージ図



(2) 病害虫防除（宮城県病害虫防除所）

① いもち病

- ・防除所の「発生予報 第6号（7月18日発行）」によれば、穂いもちの発生時期はやや早く、発生量は「平年並み」と予報されている。
- ・巡回調査によれば、葉いもちの発生地点率及び発病株率は平年より高かった。
- ・BLASTAMによる感染好適条件の推定結果では、7月中旬以降、感染好適条件が県内の各地で出現している（●が感染好適条件）。

日付	駒ノ湯	気仙沼	川渡	築館	米山	志津川	古川	大衡	鹿島台	石巻	女川	新川	塩釜	仙台	白石	蔵王	亘理	丸森
7/11	●	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	○	—	—	○	○	—	○
7/12	△	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	●	—	—	●	●	—	●
7/13	△	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	△	—	—	●	—	—	—
7/14	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
7/15	?	—	●	●	—	—	—	●	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
7/16	—	—	●	—	—	—	—	●	—	—	—	●	—	—	—	●	—	—

●	好適条件	葉いもちの大量感染に好適な気象条件(葉面湿潤時間10時間以上, 平均気温15～25℃, 前5日間の平均気温20～25℃)が出現した日
○	準好適条件1	当日の条件は満たしているが, 前5日間の平均気温が条件から外れている場合
△	準好適条件2	葉面湿潤時間の長さのみ好適条件を満たしている場合
—	好適条件なし	
?	判定不能	

- ・ いもち病の予防粒剤の効果が低下してくる時期である。ほ場をよく観察し、葉いもちの発生が確認された場合は、直ちに茎葉散布剤で防除する。

② 紋枯病

- ・ 巡回調査によれば、発生地点率は平年より低く、発病株率は平年よりやや低かった。
- ・ 前年に形成された菌核が翌年の伝染源となるため、紋枯病が前年に発生したほ場では、要防除水準を参考に防除を検討する。「要防除水準」については、病虫害防除所のホームページを参照されたい。

③ 斑点米カメムシ類【病虫害防除所 注意報 第3号（7月18日発行）より一部抜粋】

- ・ 定点調査の結果、アカスジカスミカメの第1世代成虫発生盛期は7月第3半旬であり、平年よりやや早かった。また、第2世代成虫発生盛期は平年（8月第4半旬）よりやや早い8月第3半旬と予測される。

・ 7月中旬の巡回調査によれば、本田や周辺畦畔におけるアカスジカスミカメ、クモヘリカメムシ及びホソハリカメムシの発生地点率は平年より高く、「すくいとり虫数」は平年より多かった。なお、クモヘリカメムシは県南部や県北沿岸部ですくいとり虫数が多かった。そのため、7月18日付けで「注意報 第3号」を発表し、適期防除を呼び掛けている。



【アカスジカスミカメ】



【ホソハリカメムシ】



【クモヘリカメムシ】

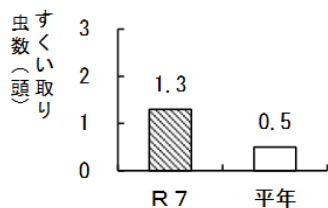


図1 本田におけるアカスジカスミカメ成虫のすくい取り虫数(7月中旬)

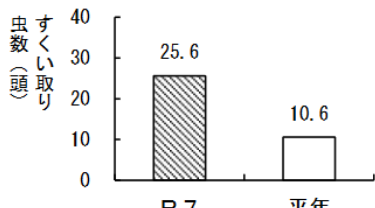


図2 周辺畦畔におけるアカスジカスミカメ成虫のすくい取り虫数(7月中旬)

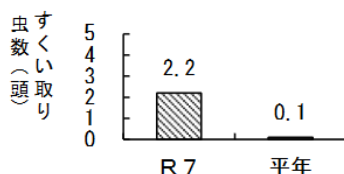


図3 本田におけるクモヘリカメムシ成虫のすくい取り虫数(7月中旬)

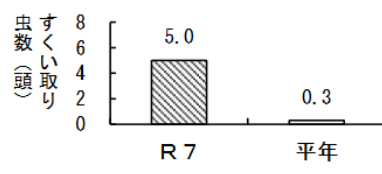


図4 周辺畦畔におけるクモヘリカメムシ成虫のすくい取り虫数(7月中旬)

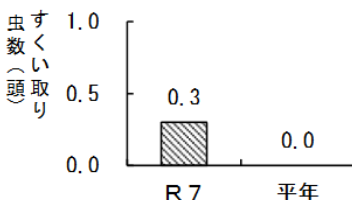


図5 本田におけるホソハリカメムシ成虫のすくい取り虫数(7月中旬)

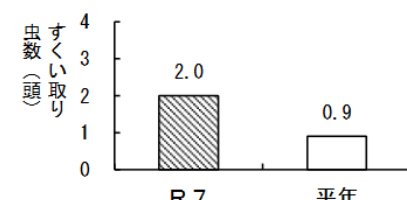


図6 周辺畦畔におけるホソハリカメムシ成虫のすくい取り虫数(7月中旬)

・水田における薬剤防除は、「穂揃期」と「1回目防除から7～10日後」の2回が基本である。ほ場をよく観察し、遅れないように防除を実施する。

・イヌホタルイが多発しているほ場では、1回目の薬剤散布を「出穂始～穂揃期」に行うことで、斑点米カメムシ類の密度を低下させ被害を軽減できる。

・すでにアカスジカスミカメの第1世代成虫発生盛期を迎えていることから、今後、水田周辺の畦畔や雑草地の草刈りを行うと、成虫を水田内に追い込み斑点米被害を助長するため、原則行わない。やむを得ず草刈りを行う場合は、草刈り後ただちに水田への薬剤防除を実施する。

◎クモヘリカメムシは水田に越冬世代成虫が浸入し、その後1世代を経過する。クモヘリカメムシの多発地域では、穂揃期とその7日後の2回防除後に、さらに追加防除を実施することにより、斑点米被害のリスクをより一層軽減することができる。

- ・ジノテフラン液剤（スタークルメイト液剤 10 等）、エチプロール水和剤（キラップフロアブル）、スルホキサフル水和剤（エクシードフロアアブル）はアカスジカスミカメに対する防除効果が高く、特にジノテフラン液剤は残効が長く、2週間程度は発生密度を抑制することができる。

◆アカスジカスミカメ成虫の発生活消長と防除体系（宮城県病害虫防除所ホームページより）

